

小西甚一道著「^{こくぶんぽう}国文法ちかみち」ちくま学芸文庫 2016年1月10日刊を読む

この本をどうよむか

1. そうすると、これからこの本をよむのに、どんな用意がいるかは、だいたいおわかりと思うが、もうすこし具体的に申しあげたいことがある。
2. (1)この本は、ある分量でひと区切りになるような述べかたがしてあるから、その区切りをうまく利用すること。
ところどころ項をあらためたり、行をあけたりして、あまり目立たないように区切りがしてある。そこで休むのが、次の勉強を能率的に進めるのに効果がある。しかし、勉強の予定とか、その人の程度とか、環境とかによって、どれだけを一回によむかは違ってくるだろう。しばらくよむうち、自分のペースがわかってくるだろうから、いつまでによみ終わるという目標のもとに、そのペースを乱さずに、平均したよみかたで進むよう、自分を訓練してほしい。
(2)よみながら、自分でノートあるいは要点メモを作ること。
本文のなかには、ちゃんと要点が示してあるし、特に憶えてもらいたいことには、注意をひくような印がつけてある。しかし、それは一般的にいつの要点であって、その人にとっては、また別に注意しなくてはならない所が出てくるだろう。そんな所は、本に赤線をひくとか、自分だけの索引を作るとか、要点の総まとめを作るとかの工夫が必要である。
(3)わたくしがこの本で何を言おうとしているかという意図に重点をおき、あまりことばの端ばしにとらわれないようにすること。
3. 最後に、いちばん問題になることだが、
(4)自分で習った説と違って、あまり気にしないこと。
というお頼みをしておきたい。ラジオで文法的解釈の話なんかすると、とたんに「わたくしは学校でこう習いましたが、どちらがほんとうでしょうか」というような問いあわせが、返事不可能の分量をもって押しよせる。お手あげである。そもそも国文法というものは、解析や力学なんかと違って、まだ確定的な学説がないのを特色とする。学問そのものが動いているのである。ぐらぐら動いている。ぐらぐらするから **Grammar** なのだと御承知ねがいたい。端ばしだけでなく、品詞のわけかたからして、違いがある。たとえば「左の文章から形容動詞をぬき出して示せ」などという問題が出たばあい、^{ときえだもとき}時枝誠記博士の教科書で習った人は、ポカンとしているよりほかないだろう。時枝文法では、形容動詞という品詞がないからである。まして、終止形につく「なり」が伝聞推定であるか詠歎であるかといったような細かい点になれば、学者によって説が違うのであって、学界ぜんたいで誰もが認めている説というものは、まだ無いようである。だから、わたくしは、いまいちばん広く認められている文法学説

によってお話を進めるわけだが、それと違った説で習った人の全部を納得させるような説明も、ある程度までは心がけるであろう。しかし、それを徹底的に試みると、とてもこの程度の本では書き切れないし、なるべく頭に入りやすいような書きかたと矛盾する。それで、あまり細かな学説の差などは無視するよりほかないだろうと思う。いまの文法研究からいって、やむをえないわけだが、違った説でお習いになった諸君も、わたくしの述べるような説がひろくおこなわれているのだと理解してくださることは、けっして無用でないだろう。

これだけの前おきをして、いよいよ本すじに入ることにしよう。

4. (1) 「国語」の勉強は、正しく美しい日本語を身につけるのが目的。日本語をゆがめるような方向に文法が悪用されてはならない。
- (2) 文法の術語や定義にあまりとらわれるな。「文法的な眼」を解釈のなかに生かす方が、はるかに大切である。
- (3) 文法はあとから考えた理屈だから、割り切れないところが残るのは当然。学説のちがいをあまり気にするな。
- (4) 理論体系と勉強の順序とは、かならずしも一致するにはおよばない。体系よりも、実際の「言いかた」として頭に入れることが必要。
- (5) 国文法の勉強は、国文法だけ勉強するのでは、十分に効果的ではない。ものごとを孤立的に考えるな。

P20 ~ 23

<コメント>

復刊運動をしてようやく出版された小西甚一先生のまぼろしの名著「古文の読解」に続いて復刊された「国文法ちかみち」。「古文研究法」とともに座右の書として大いにご活用を。これに大修館書店刊の小西甚一著「基本古語辞典」を加えれば古文はバッチリです。

2018年11月26日(月)林明夫記